

電子手紙と仕事（研究活動？）

西村 拓

世間で、内実はともあれネットネットと騒いでいる折りに、いまさら、「ネットワークとは」などというもおかしいようであるが、我々（この誌面を目にする人の多くが属する）の分野では、電子的なネットワークの整備もしくは普及があまり進んでいないといえるのではない（こんな話は、よけいなお節介という声も聞こえるし、人的なネットワークが先という話もあるがそれはさておき）。たとえば、電子メールを例にすると、理学系、工学系では、数年前から教官どころか学生のレベルで使いこなされてきているのに対して、土壌に関する分野では、土壌肥料学会の電子メールのアドレスリストの（研究者の数に比べて）閑散とした様子や農業土木学会のホームページやメイリングリストに関わる人たちの偏りなどが、この新しい情報メディアへのなじみが依然として薄いことを示していると思う。その中でも水資源水文学会は、理学系、工学土木系の研究者が多いため会員名簿に電子メールのアドレスが載っているなど、比較的使いなじんでいるようである。土壌物理研究会では、事務局内でこそ、事務連絡などに電子メールが活用されるようにはなりつつあるが、会員間では限られた個人間で使われているに過ぎない。筆者の留守宅ならぬ留守学、生物・環境工学（旧農業工学）専攻では、今年度から専攻内の教官間の連絡などに本格的に電子メールが使われるようになったが、これは専攻内のいくつかの研究室が強く推し、さらに実際にボランティアとして労力を費やして専攻内のメイリングリストを作成してくれたことが大きな推進力であった。また、WWWによるホームページもいくつかの機関で立ち上げられ始めているが、自機関の情報を提示しているだけで、内容に興味を持ってコンタクトしようと思っても電子メールのアドレスも機関の住所も見つからないので連絡の取りようがないということが多く、不特定多数への情報公開という意味ではまだまだ不十分である。

筆者が滞在中の土壌侵食研究所では、コンピューターの管理を職務の一部とする職員がネットワークを維持し、セミナーの開催から昼食会の案内や出欠の返事まで所内の情報全てが電子メールで行き来しているのに加えて、上部機関の米国農務省の地域事務所では、上への意見は（電子化するのが面倒なので）電子メールで送れと

まで言っている。また、既往の論文の検索から実験データの転送まですべてが、所内のネットワーク上で行われている。この状況下で時折、日本の研究者に連絡をとりたので電子メールのアドレスを教えて欲しいと依頼されることがあるが、場合によって「ない」もしくは「使っていないようである」と答えると、大学や国立試験機関の研究者でも電子メールを使っていない人がいる（ましてや電子大国ニッポンなのに）ということで驚かれる。

筆者も、Unixなどでできるだけ触りたくないというような凡々たるユーザーである。しかし、昨年、DOS/Windows上で電子メールを本格的に使い初めてすぐに、電話と同程度もしくはそれ以上の頻度で使用するようになった。これは、Faxや郵便では、受付や配達時間の問題などで、この忙しい時勢に合わないという職場（大学）の事情も大きいですが、10分を争うような時以外は、「お互いに来たものは読む」という暗黙の了解が守られる限り、送り手と受け手それぞれが各々のペースで情報交換をする電子メールで十分用が足りることや実験中の突然の電話が煩わしいということが大きな理由である。しかしながら、一時期は電話が便利だといって、全く書かなくなった手紙を、電話が便利すぎて逆に煩わしいという理由で、再度（手書きではないが）書き始めるというのも何かおかしなものがある。

電話、Fax、（従来の）手紙に対して、電子メールが明らかに勝っているのは、受け取った情報を、そのまま容易に電子情報として（ワープロなどに写す（移す）こと）活用できるという点である。大学や研究機関に働いていると、文章やデータのやりとりを行うことが少なくない。そのたびに「プリンターで出力、Fax送信、再打ち込み」というような方法をとってはい手間がかかって仕方がないし、フロッピーディスクを送る場合は、時間がかかるの以上に送付中の破損事故という危険が大きい。

筆者は、以上のような理由で、同じ仕事をこなすには、電子メールを初めとした電子情報を活用した方が効率的で楽であると考えているが、電子メールを使うと仕事が増えて嫌だという人もいる。しかし、たとえば過去にFaxとコピー機の普及でどれだけの仕事効率が上がったかを考えると、導入に伴って増えた仕事量について

云々することはないだろうし、今ではコピー機のなかった時代の研究者の生活は、想像もできなくなっている。今度は、電子メールと電子化された情報（たとえば、普及が進みつつあるCD-ROM化された論文要旨集など）にその役目が回ってきているのではないだろうか。

現在の筆者のように海外滞在中の場合は、この電子ネットワークは特に重宝する。個別の問題はあるが、多くの場合、DOS/VやMacのノートパソコンを持参しネットワークに繋がれば、日本語でのメールのやり取りが可能になる。相手機との相性などで着信が保証されないFaxや時間がかかるわりに本当に着くのかどうかかわからない郵便では、仕事どころか情報交換もできかねる。国際電話は安くなったとはいえ、気軽にかけるほどの金も持ち合わせてはいない。最近では、一般の人でも気軽に商業ネットワークに入っていることもあり、現在は、公私あわせて8割がたが、電子メールで通信していて、郵便の利用は現物を送るなどやむを得ない場合のみとなっている。この原稿も電子メールで送稿する予定

で、締め切りぎりぎりを書いている。（安定したネットワークを維持するために時間を費やして保守管理をしてくれる方々（多くはボランティア）には本当に感謝しないとイケない。）

長々と書いてきたが、電子メール等は単なる道具に過ぎないことは明らかである。道具なのだから個人個人が使ってみて便利なら使えばいいし、不便なら使わなければいいと思う。しかし、一度は使ってみるべき道具であると断言したい。また、電子メール、WWW等、手段が改竄されても、送る情報がなければ使う機会もないのは当然である。新しい便利な道具を活用して、送り出すべき情報を生み出す仕事にもっと時間が割けるようになると良いと思う。

さらに、興味がある場合は、例えば“ネットワーク整備に入れ込む理由(わけ)”，溝口 勝（農業土木学会誌，vol. 67 (7)，pp. 62-63 (1996) や <http://www.bio-mie-u.ac.jp/doboku/user1/mizo/inetworks.html>）等を参照してほしい。